

令和 4 年 5 月 8 日現在

機関番号：15501

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2021

課題番号：20K21960

研究課題名(和文)村上春樹文学におけるアダプテーション研究 外国人翻案者テキストに着目して

研究課題名(英文)Adaptation Research in Haruki Murakami's Literature: Focusing on The Text of Foreign Adaptors

研究代表者

山根 由美恵 (Yamane, Yumie)

山口大学・教育学部・講師

研究者番号：40566725

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果として、1：「村上春樹文学アダプテーション研究序説」という理論的な見直しに関する論文、2：舞台「海辺のカフカ」論、3：漫画「螢」論、4：「ねじまき鳥クロニクル」論、5：「三つのドイツ幻想」論を発表した。加えて、映画「森の向う側」の発表を行い、2022年度に論文化する目処がたっている。このうち、2：舞台「海辺のカフカ」論を所収した『村上春樹 物語の行方 サバルタン・イグザイル・トラウマ』の執筆を行い、2022年5月にひつじ書房から出版した。全体として、当初の研究計画以上の研究成果をあげることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の目的は、グローバル規模で活発化している村上春樹原作のアダプテーション(翻案)の分析を通じ、アダプテーション研究の可能性とともに、村上文学の「日本」性および人種や国を超える普遍性について解明することである。本研究の成果は、文学の想像力が舞台・映画・漫画などメディアを変化させながら広がる過程を解明し、現代文学と文化の密接な関係とともに、村上文学の独自性であるグローバルな広がりについて言及し、現代文学・文化の意義を問うたものとなっている。

研究成果の概要(英文)：The results of this study are as follows. (1) An paper on the theoretical perspective of "Introduction to Haruki Murakami's Literature Adaptation Research," (2) An paper on the play on "Kafka on the Beach," (3) An paper on the cartoon "Hotaru," (4) An paper on the "Wind-Up Bird Chronicle", and (5) An paper on "Three German Illusions". In addition, I gave a conference presentation on the movie "The Other Side of the Forest.". I wrote "Murakami Haruki: The Story of Sabartan Exile Trauma," which contains (2), and published it in May 2022 by Hitsuji Shobo. As a whole, I was able to achieve more than the initial research plan.

研究分野：日本現代文学

キーワード：村上春樹 アダプテーション 世界文学

1. 研究開始当初の背景

アダプテーション(翻案)はメディアやジャンルを超え、強い影響力を持つ文化現象であるが、「オリジナル」(原作)に対して二次的で劣る、自律的に存在し得ないものとして捉えられてもきた。こうした状況下、リンダ・ハッチオンは現代のアダプテーションがインターネットの普及に伴って、インターメディア性(メディアを横断する芸術運動)が増したことを強調し、その上でアダプテーションには「創造的および解釈的に置き換える作業」としての自律的価値があると発信した(『アダプテーションの理論』2006)。日本では、2014年以降にアダプテーション研究を通じて、テキスト精読を中心とした研究方法の問い直し、新しい文学/映画研究としての試行がなされている(武田美保子他編『アダプテーションとは何か 文学/映画批評の理論と実践』2017)。近年、村上春樹文学のアダプテーション(以下、村上翻案と記す)も盛んに行われており、2018年以降は映画化・舞台化の動きが目立っている。更に、その多くが日本人以外の翻案者であることが他の日本人作家のアダプテーションのケースと異なり突出した特徴となっている。現在、村上文学は国内の読者数より海外の読者数が多く、海外の翻案者の増加はこれら享受の様相と深く関わっているが、近年の増加傾向は驚異的であり、明らかにこれまでのアダプテーションの有り様とは異なっている。

2. 研究の目的

本研究は、近年活発化しつつある村上翻案の解明を通じて、アダプテーション研究の新たな可能性を探るとともに、日本人自身が気づいていない村上文学の「日本」性、文化や国を超える普遍性を討究することを目的とする。本研究では、これらのアダプテーションが2018年を境に文化の異なる世界で同時に発生していることに特に注目しており、現在起きつつある村上文学をめぐる享受のターニング・ポイントを捉えることを目指している。

近年村上文学は「世界文学」と評されることが多いが、村上翻案も外国人翻案者が関わる作の多さが特徴と言える。村上翻案を文学的想像力から生まれ、「翻訳」された広義の「文学」と捉えた場合、「世界文学」研究の知見は村上翻案研究にも有効な視座をもたらすだろう。デイヴィッド・ダムロッシュは「作品はある外国文化の空間に迎え入れられることによって世界文学となる。その空間は、受入国の文化における国民的伝統とそこに属する作家たちのそのときどきのニーズによって、さまざまに画定される。世界文学の作品はたった一つで異なる二つの文化間の交渉の軌跡を描きだす」と述べている(『世界文学とは何か?』2011)。ダムロッシュの定義はリンダ・ハッチオンの述べる「別の文化に置き換えられる、したがってときには別の言語に置き換えられる際に、アダプテーションが生み出す変化によって、受容と創作のより広い文脈について多くのことが見えるようになる」(『アダプテーションの理論』2006)との類似性があり、これらの類縁性に私は着目している。村上文学のみならず、村上翻案には出版・観客動員戦略をめぐるグローバリズム(それは新自由主義化でもある)が絡んでいることは明確であり、「世界文学」研究の視点を村上翻案研究に敷衍させる有効性は高いと思われる。

あわせて、私は村上翻案の成熟があるのではないかと捉えている。翻案が珍しかった時期の映画「トニー滝谷」(2005)では、村上文学の雰囲気や壊さないように細心の注意を払われていたが、近年では翻案者の独自の解釈やオリジナリティ要素が増え、その試みが成功しているように思われる(映画「バーニング」(2018)・「ドライブ・マイ・カー」(2021)等)。このように通史的な視点から変化を追うことで、アダプテーション研究は文学享受の成熟度をはかる物差しとなり、アダプテーション研究の更なる可能性と意義に繋がる試みであると考えられる。

3. 研究の方法

本研究では、1) リンダ・ハッチオン『アダプテーションの理論』、ジェラルド・ジュネット『パランプセスト 第二次の文学』(1995)、中村三春『原作の記号学 日本文芸の映画的次元』(2018)を基盤とし、村上全翻案に対する通史的な見通しの作成、2)これまで舞台関係者だけが保有し、研究者に公開されていなかった上演台本(舞台「海辺のカフカ」)の分析、3)漫画「螢」作者へのインタビューとそれに基づく分析、4)アダプテーション原作の分析という方法を取った。当初の研究計画は：舞台「海辺のカフカ」、：映画「バーニング」、：舞台「ねじまき鳥クロニクル」を対象としたものであったが、コロナ禍のため「バーニング」に関する韓国調査を断念し、代わりに漫画「螢」の作者：森泉岳土氏へのインタビューを行った。

1年目は、1)の基盤となる理論書・研究書の解析という基礎作業、2)「海辺のカフカ」台本に関する分析と論文化、3)漫画「螢」作者：森泉岳土氏のインタビュー(Zoom)、4)アダプテーション原作「ねじまき鳥クロニクル」分析という方法を取った。2年目は、1)全翻案の分析と発表・論文化、3)漫画「螢」の分析と発表・論文化、4)発表メディアに着目した「三つのドイツ幻想」の分析と発表・論文化を行った。「三つのドイツ幻想」は当初の研究計画になかった

対象だが、発表メディアとテキストの関係という観点から、アダプテーション研究の方法論試行として研究を進めた。

4. 研究成果

研究成果として、2020年度は自身が主催する研究会「村上春樹とアダプテーション研究会」(Zoom オンライン)を11月から立ち上げ、月1回の頻度で活発な討議を行った。発表としては、国際シンポジウム、招待合評会、研究会発表をそれぞれ1回ずつ行った。論文としては「舞台が原作を凌駕するとき 舞台「海辺のカフカ」における「戦争」表象」(『国文学攷』2020)、「ナツメグ・シナモンの語り可能性 「ねじまき鳥クロニクル」における「二次トラウマ化」「世代横断的トラウマ」」(『近代文学試論』2020)を発表した。コロナのため、映画「バーニング」に関する韓国調査が行えなかったが、代わりに漫画「螢」作者へのインタビュー(Zoom オンライン)を行った。

2021年度も「村上春樹とアダプテーション研究会」(オンライン)を月1回の頻度で開催し、日本文学研究者だけでなく、映画学、比較文学などの研究者とともに学際的な討議を行った。発表としては、国際シンポジウム(1回)、研究会発表(4回)を行った。特に2021年度はアダプテーション理論に関する発表を行い、理論的な補強を行えたことが成果と言える。論文としては、研究全体の方向性に関わる村上アダプテーションに関する理論的な見通しの論考:「村上春樹文学アダプテーション研究序説」(『近代文学試論』2021)、漫画家本人のインタビューを行い、これまで論文化されることがない貴重なテキスト漫画「螢」に関する「原作からの逸脱 森泉岳土「螢」(漫画)における 削除の戦略」(『国文学攷』2021)、発表されたメディア媒体に着目した「『BRUTUS』から見る村上春樹「三つのドイツ幻想」 「幻想」(ためらい)を生み出す現実」(『層 映像と表現』2022)を発表した。加えて、発表した映画「森の向う側」論は2022年度に論文化する目処がたっている。あわせて、舞台「海辺のカフカ」論を所収した『村上春樹 物語の行方 サバルタン・イグザイル・トラウマ』の執筆を行い、2022年5月にひつじ書房から出版した。全体として、当初の計画以上の研究実績を挙げることができた。また本研究の活動をより広範囲に公表するために、研究会のホームページの作成も進めており、2022年度中に開設予定である。

本研究成果として、下記のような通史的な見通しを得た。村上文学アダプテーションは、次の三つの時期に分けられる。 :1980年代、 :2003~2015年(2010~12年に山)、 :2017年~現在(2017~19年に山)である。 は、1980年代の映画四作のみであり、評価は芳しくなかった。映画「風の歌を聴け」について、四方田犬彦は村上と大森一樹監督の方向性が異なっており、「まったく評判にならなかった」、その後三作が公開されるも、「『森の向う側』というフィルムを撮った後、彼は自作の映画化の申し出を拒み続ける。彼と同世代であり、ニューシネマの洗礼を受けた原田真人が1988年に『ノルウェイの森』を映画化したいと申し出たとき、村上は、たとえキューブリックが映画化したいと言っても自分は断ると、にべもない返事をする」と述べている(「村上春樹と映画」(『世界は村上春樹をどう読むか』2006)。80年代の作は、村上を満足させるものではなかったと予想される。

その後10年以上、村上には翻案化を許さない姿勢を続けてきたが、2000年代に変化が訪れる()。2003年に舞台が、2005年に映画と舞台が一作ずつ公開された。特に映画「トニー滝谷」は注目度が高く、四方田は市川準監督の作風への共感が映画化を承認した理由ではないかと推察した。市川は今までのリアルな映画の撮り方では村上春樹ファンを裏切ることに感じ、これまでの自分の映画にない試みを行い、村上の「現実の地上から何センチか浮いているような小説世界」を描こうとしたと語っている。村上文学の翻案化は、翻案者のそれまでの方法の変化を「要請」させるくらい困難な営みであったことが窺える。その後、2008年以降にグローバル規模で村上翻案が同時発生した。辛島デイヴィッドが詳細に述べるように(『Haruki Murakami を読んでいるときに我々が読んでいた者たち』2018)、村上には1990年以降戦略的に英語圏の出版に臨み、『ねじまき鳥クロニクル』(クノッッフ社・1997)のブレイクを生み出した。これを機に欧米圏での出版は加速する。私はこれら出版戦略の成功、『The New Yorker』誌での複数掲載と掲載作の高評価が村上の意識を変化させ、出版化だけではない海外戦略の一つの形として、2000年以降翻案化も承認する方向へ変わっていったのではないかと考えている。それはこの時期の翻案が外国人翻案者が関わるものが多いためである。なお、2013年以降、絵本(独・米・英・伊・デンマーク)という形で翻案は継続的に発表されているが、映画等の翻案化は沈静化していた。

しかし、 :2017年から現在にかけて再び数多くの翻案が公開される。特に日本公開の作が多かったことから、日本の一般読者は村上の翻案化が突然始まったという印象をもたらす。これは近年村上が日本のメディアに多数登場したり(村上RADIO等)、早稲田大学への蔵書寄贈による村上春樹ライブラリー設立といった日本国内での積極的な活動とリンクすると考えられる。つまり、海外戦略はそれなりの成果が出たため、日本国内戦略へと舵を切ったという流れで

ある。地下鉄サリン事件後の日本帰国を第一次日本回帰とすれば、この動きは第二次日本回帰と言えるかもしれない。ここで村上の著作の動きと合わせると、この時期は「騎士団長殺し」(2017)と短編集『一人称単数』(2020)が発表されている。拙稿で述べたが、「騎士団長殺し」はそれまでの村上文学の要素をまとめる傾向となっており、新しい試みが見られない。同様に『一人称単数』もそれまでの短編集より評価は低い。こうした創作力の低下と日本のメディア露出・日本発の翻案増加は連関する可能性がある。 については、今後の動向と合わせて考えていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 山根 由美恵	4. 巻 250
2. 論文標題 原作からの<逸脱> 森泉岳土「螢」(漫画)における<削除>の戦略	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国文学攷	6. 最初と最後の頁 29-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 山根 由美恵	4. 巻 59
2. 論文標題 村上春樹文学アダプテーション研究序説	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 近代文学試論	6. 最初と最後の頁 105-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 山根 由美恵	4. 巻 14
2. 論文標題 『BRUTUS』から見る村上春樹「三つのドイツ幻想」: 「幻想」(ためらい)を生み出す現実	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 層: 映像と表現	6. 最初と最後の頁 94~113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14943/101731	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 山根由美恵	4. 巻 246
2. 論文標題 舞台が原作を凌駕するとき: 舞台「海辺のカフカ」における「戦争」表象	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国文学攷	6. 最初と最後の頁 15-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山根由美恵	4. 巻 58
2. 論文標題 ナツメグ・シナモンの語りの可能性：「ねじまき鳥クロニクル」における「二次トラウマ化」「世代横断的トラウマ」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 近代文学試論	6. 最初と最後の頁 57-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/51596	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 山根 由美恵
2. 発表標題 「村上春樹アダプテーション序説」、 「村上春樹「三つのドイツ幻想」論 「幻想」を創り上げる方法・『ブルータス』に着目して 」
3. 学会等名 村上春樹とアダプテーション研究会（第5回）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山根 由美恵
2. 発表標題 原作からの 逸脱 森泉岳土「螢」（漫画）における 削除 の戦略
3. 学会等名 村上春樹国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山根 由美恵
2. 発表標題 リンダ・ハッチオン『アダプテーションの理論』解説1（1-3章）
3. 学会等名 村上春樹とアダプテーション研究会（第9回）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山根 由美恵
2. 発表標題 映画「森の向う側」論ー重なり合うドラマ/響き合う「森」ー
3. 学会等名 村上春樹とアダプテーション研究会 (第12回)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山根 由美恵
2. 発表標題 リンダ・ハッチオン『アダプテーションの理論』解読2 (4-6章)
3. 学会等名 村上春樹とアダプテーション研究会 (第14回)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山根由美恵
2. 発表標題 村上春樹「ねじまき鳥クロニクル」再考 「トラウマ」という 運命 を超えて
3. 学会等名 村上春樹国際シンポジウム (第九回) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山根由美恵
2. 発表標題 MURAKAMI REVIEW 1号 合評会
3. 学会等名 村上春樹研究フォーラム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山根由美恵
2. 発表標題 「イグザイル」の彷徨い 「ダンス・ダンス・ダンス」
3. 学会等名 村上春樹とアダプテーション研究会（第一回）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 山根 由美恵	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 432
3. 書名 村上春樹 物語 の行方 サバルタン・イグザイル・トラウマ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------